
our future is forever。 +°

門無 澪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

(前書き)

若干シリアスかもしれないですが、短いので気軽に読んでください。
それではどうぞ！

私はいつも孤独…

いつも待つてるだけ…

辛いし寂しい…

胸が苦しいし、疲れる…

貴方じゃなかったらこんな待ってられないよ。

貴方だからこんなに待ってるんだよ。

貴方のあの言葉に支えられて生きてるんだよ。

太陽の日差しが眩しくて雲一つない青空が広がっている時も、

私の悲しみを洗い流すかのような雨の時も…

この空を貴方が見てるって信じてるから…

この空で私たちが繋がってるって思えるから…

私は貴方が思ってる程弱くないんだよ？

だけど、みんなが思ってる程強くないんだ。

待つて待つて待ち続けて…

限界なんて言葉忘れちゃうくらい。

みんなが貴方のことを貶したら、私は私の為に怒る。認めたら私が

消えてしまいそうだから…

なんでそんなに待てるのかって…

そんな愚問聞き飽きたよ。

決まってるじゃない、それは…

.....

駆け抜けるように時は過ぎて…

独りで迎える5度目の春がやってきた。

あなたは今、どこにいますか？

まだ寒さが残る中で、私は花壇に咲く一輪の華を見つめていた。打ちひしがれても倒れることのない、強くも儂い華を。

あの時頭の中の色鮮やかなパレットで描いたキャンパスライフ…でも、今考えてみれば、全て貴方が隣にいたみたい。誰が否定したって待ち続けるよ。だけど寂しいよ…

あの言葉、本当ならもう一度聞かせて…

逢いたい 新一！

あの純真無垢な笑顔、私だけに振りまいてよ。謎が解けたときのあの笑みで私を安心させてよ。

17歳の時にいきなりいなくなつて…

帰ってきたかと思えばまたすぐに消えて…

ついには姿も見せなくなつて…

私は待ち続けるのが正解だって信じてる。

「蘭もよくこんな待つてられるよ。生きてるかどうかも分からない

し、女をこんなに待たせる男なんて…」

「新一は言ったの。待っていてくれって。私は勝手に待ってるだけ。新一はなにも悪くないのよ。」

「はあ…あいつも幸せもんねえ…」

親友の園子とのこんな会話、初めてじゃない。園子はそのたびに同じ事を言っ、私はそのたびに同じ事を答える。

園子は大学を卒業したら真さんと結婚することが決まっている。

周りの環境は確実に変わっているが私は変わらないでいる。貴方のために。

そんなこんなで味つけのない平凡な日々を過ごしている私。

帰り道にはいつも馬鹿でかい屋敷を覗いていく。
たまに、埃の被った推理小説を見かねて掃除もする。

「今日も行くの？」

「うん。なんか…あそこにいると落ち着くよ。あいつの声が聞こえてきて…一時だけだけど安心させてくれるのよ。」

『蘭…』

こんな一言だけの幻が見たくていつも通う。

「園子：私、期待しているのかもしれない。あいつがいるんじゃないかって。」

「蘭：あんたも少しは素直になつたみたいね。わかった、もう止めないわよ。気が済むまで待ってあげなさい。でも、辛くて本当に耐えられなくなつたら私に言って？まあそうなつたらこの園子様が許さないけどね！」

「園子：ありがと！なんか元気出た！じゃあね！」

「また明日ね！」

そう言つて別れ、私はあの家に向かった。

ドアをゆっくり開けて中を見渡す…
なんの変化もない。

「そろそろ掃除するべきかな？」
そう言いながら私は本がひしめき合うあの部屋に足を向けた。

カチャッ

『蘭…』

また聞こえた…この声。やっぱりすごく落ち着く…何度でも聞きだ
い…

目を閉じて感傷に浸る…
もう一度聞きだいな…

幻だっつて分かつてるけどせ...

『！っん！蘭！』

「え？」

瞼の裏に隠れていた透き通るような瞳が現れて捉えたもの…それは
紛れもなく、私が待ち続けた想い人…

自然と零れる真珠のように美しい大粒の涙…

「新…一？」

「待たせたな…」

「本当に新一なの？」

貴方は何も言わずに私の涙を優しく拭ってくれた。

私は気づいたら貴方を強く抱きしめてたみたい。
貴方は一瞬驚いたみたいだけどすぐにギュツと抱きしめ返してくれ
た。

最高に幸せな時が流れ、優しく私たちを包んでくれた。

「いきなりいなくなって…」

「わりい…」

「ずっと待たされて…」

「…」

「新一じゃなかったらこんな待たなかったよ？あの時、最後に会っ
た時に新一が言ってくれたあの言葉が無かったら…」

「蘭…」

その驚いた顔：私が弱い知っててやってるの？

「あ、あの言葉、信じていいんだよね？」

返事の代わりに突然貴方は私の顎に手を添えた。
私は一瞬なんのことだか分からなくて…

理解した頃にはもう貴方の柔らかな唇は私の唇に触れていた。
初めての口づけ…貴方で良かった。嬉しい。

「もう絶対離れないから…蘭…愛してるよ、この地球上の誰よりも。」

「新一…」

私も返事の代わりに私より背の高い貴方の首に腕を回して口づけをした。
神様は見捨てなかったんだ。そして、最高のご褒美を与えてくれたんだね。

そのまま、私は新一の腕の中で朝を迎えた。この温もりが私の待ち焦がれたもの…。二度と失いたくない。

なんでこんなに待てたのかって？

そんな愚問聞き飽きたよ。

決まっているじゃない。それは…

貴方が好きだからよ。愛してるから…

もう貴方は私の前から消えない。

それは二人の左の薬指に光る指輪が証明してくれている。

貴方の前ではいつも素顔の私でいれる。

やっとの想いで掴み取った真の愛は色褪せない…。

o u r f u t u r e i s f o r e v e r

私たちの未来は永遠…

(後書き)

どうでしたか？若干蘭のイメージが崩れた気がしなくもないですが、
気にしないでください。短編は初めてだし、蘭を一人称で書くのは
思った以上に大変でした。でも自分では納得いっけます(笑)感想
とか指摘とかお待ちします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1412h/>

our future is forever. +°

2010年10月10日06時40分発行